

Title	「蜀学」と「儒学」 : 「蜀学」の歴史及びその儒学 に対する貢献
Author(s)	舒, 大剛
Citation	中国研究集刊. 2017, 63, p. 2-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70142
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

(特集)

「蜀学」と「儒学」

―「蜀学」の歴史及びその儒学に対する貢献

小序

広漢」および「巴蜀同俗」(産ュ)の武都・漢中・犍為・牂 髳・微・盧・彭・濮)と、『漢書』地理志の「巴・蜀・ る。『尚書』牧誓が提示する「西土八国」(庸・蜀・羌・ み、ほとんど我が中国の全ての西南地区を包み込んでい 川・重慶・漢中・滇北・甘南・鄂西・湘西などの地を含 展してきた学術である。空間的に見ると、おおむね四 えており、また中原の学術と互いに連携し合いながら発 蜀学」は巴蜀の大地に発生し、それ自身の特色を具

> 牁 呉越・荊楚・嶺南などの地域文化と同様に、中国文化の ローバルな価値を具えている。 的な意義を具えているだけでなく、中国全土ないしはグ 燦爛たる宝庫のなかの重要な組成部分であり、単に地域 あり且つ極めて特色に富んでいる。三秦・三晋・斉魯・ り晩清に至っている。このように蜀学には悠久の歴史が 越巂などの地に相当する。時間的に見ると、上古よ

山があり、 る。まさにその相対的に独立し、且つ閉鎖的でない地理 1時に「桟道千里、 巴蜀の地は中国の西南地区に位置し、北に秦嶺と大巴 西と南には高原があり、東には三峽があり、 所として通じざるは無し」(注2)であ

同

舒

大

剛

白井

順

訳

代より以後、 を経験したが、 ものの、 三教九 儒の三種の思想体系を取り入れてそれらを融合した。漢 氐・羌が併存し、 0 環境であればこそ、はじめて蜀学は開放性と包容性など 一者が共同で継承するところとなった。 特徴を具有しえたのである。 多種の文化がここに融合された。 唐宋に高潮 流 両漢に最初の隆盛を迎え、魏晋南北朝には低迷し 晩清民国にふたたび隆盛するという歴史の演変 の同源にして異流の文化モデルを次第に形成 儒、 その創造した多くの成果は儒教 巴・蜀・華を涵容し、兼ねて易、 釈、道を受け入れ、自ら体系を成し、 元明で持続し、 先秦の巴蜀には、 清初には沈黙した 歴史上、先秦で育 ・道教の 夷 老、

二、「蜀学」の主要な成果

ら蜀学の成果を帰納することができる。れば、制度・経典・信仰・価値観という四つのレベルから見は文史に在り」(建3)と言う。しかし国学のレベルから見る学の成就に関して、劉咸炘は『蜀学論』の中で「大

陶

0

しかし北宋のもう一人の重臣・席益亦は

の中で「蜀儒の文章は

天下に冠たりて、

『府学石経

な

言い方には誇張している部分があるかもしれ

教化を推し進めた。四川の人間として

学を振興し、

制度面

制度の建設は、影響の長い深層レベルの建設である。

九

今皆存す。孝景帝の時より、

太守文翁始めて石室

近世には則ち石

学校の盛は、堂図籍記』の

漢には石室と礼殿を称す。

二に曰く、周公の礼殿、三に曰く、 を崇尚して無為にして治まるとした)、文翁は西南に儒 視はまだ始まっておらず、景帝は守成の君であり、 時期はちょうど景帝と武帝の間にあたり 翁がこの行動をとったのは特別のところに理由がある。 文翁蜀郡の為に学校を市に起こす……」(注4)と言う。 道衰微してより郷校は毀廃し、秦の暴に罹るも、 垂るるもの、其れ三を具有す。一 閣落成記』に、「蜀学の盈 などの人が創意工夫したものである。 建てたもの、『蜀刻十三経』は五代の孟蜀時期に毋昭 てたもの、高公礼殿は後漢後期の蜀郡太守高 経』がある。 ものとして、 古代巴蜀が制度の建設方面において成就した成果の主な 武間に至りて、 文翁 文翁石室、 典章の風化は稍や復た講ぜられ、 石室は前漢の景帝末年に蜀守文党が 高公礼殿、 (盛)、天下に冠たりて無窮に に曰く、文翁の石室、 石壁の九経。 それに『蜀 呂陶の (武帝の儒学重 (目矢) 『府学経史 漢の景 刻十二 文

原王朝にくらべると中身は同じだが、建制は四〇〇年あの礼殿を石室の東に作り、邃古以来の君臣聖賢を図画の礼殿を石室の東に作り、邃古以来の君臣聖賢を図画の礼殿を石室の東に作り、邃古以来の君臣聖賢を図画を作る。東漢の興平元年に至りて、太守高(目矢)周公

与えている。『漢書』循吏伝に言う。石室学宮を創設したことについて充分に肯定的な評価を『漢書』循吏伝と『漢書』地理志はいずれも、文翁が

まり早い。

文翁は、廬江舒の人なり。少くして学を好み、文翁は、廬江舒の人なり。少くして学を好み、 文翁は、廬江舒の人なり。少くして学を好み、 文翁は、廬江舒の人なり。少くして学を好み、 文翁は、廬江舒の人なり。少くして学を好み、 文翁は、廬江舒の人なり。少くして学を好み、 文翁は、廬江舒の人なり。少くして学を好み、

のである。

雅を好むは、文翁の化なり(注章)。を立て、歳時の祭祀絶えず。今に至るまで巴蜀の文が始を為すと云う。文翁蜀に終わり、吏民為に祠堂をして皆学校官を立たしむるは、文翁よりしてこれ

文翁祠があり、成都市青羊区には文家場が、 得る主要な道が孝廉に挙げられることと納貲であったこ 路がある。 まだ高々と「文翁石室」の額牌匾が掲げられ、校内には りである。今日に至るまでずっと、石室中学の大門には が代々文翁を祭るのは上引の『漢書』循吏伝に述べる诵 は文翁から始まったのである。 意義は重大であって、地方政府が学校を開くということ 最初に開いたことになる。文翁が学問を重んじた行為の とを考えると、蜀郡が文化的成績によって仕官する道を 通じて重要な職位を担った人もいて、当時漢朝の官職を 文翁が蜀を治めた時に、 いずれも文翁を記念するために設けられたも 知識や文化を学習することを したがって、巴蜀の人々 市内に文翁

翁が蜀を教化する以前に成立しているのである。巴蜀文実は、司馬相如は文帝の時に有名になり、その学問は文翁興教の影響を受けたのかどうか、という問題である。ひとつ取り挙げるに値することがある。司馬相如は文

学の推進と発展にとって重大な貢献をした。彼の成功は 献 遵・揚雄の徒、 以て世に顕わる。郷党はその跡を慕循し、後に王褒・厳 郷党にとって模範的なはたらきをなしたのである。 の辞賦は極めて深い経学の基礎技能を体現しており、 馬相如はかつて臨邛の白鶴山に従って経学を学習し、 『益部耆旧伝』の佚文が記載するところによれば、 地理志に「司馬相如は京師・諸侯に游宦し、文辞を 文章は天下に冠たり。 文翁その教を倡う 『漢 蜀 そ 司

るは、

相如これが師たり」と述べる。

峨の洙泗』と為す。文の治道に関わり有ること此くの如 馬遷の立伝はこれを徴す。 はもっと適切である。彼は『全蜀芸文志』序文中におい するのは、 文翁を称賛する。『漢書』循吏伝が文翁を第一位に列挙 向かう。 てこう述べる。「昔漢代の文治、これを興す者は文翁な てざるを以て、(文)翁は絶業を振厲し、挙ぐる所風に 先人は「景帝の儒に任ぜず、又た郡国向に未だ学を立 礼殿の図は、後世の学を建つる者これに仿うなり。 文翁の功は誣うべからざるなり」。 固より循吏の首となるは宜なり」(注て)と盛 彼が教育を重視したからである。 当時号して『西南の斉魯、 楊慎の評価 んに 岷

学術 面

ことがなく、 が分かる。 いて挙げられ、且つ門戶の見と師法・家法の固守という る」(注意)と言うが、蜀学の主要な成果は文学と史学にお し。封軫の以て阿私するに非ず、誠に素絲の染紫を懼 大は文、史に在りて、戈矛の攻撃寡なく、 咸炘は 『論蜀学』のなかで、「蜀学を統観するに、 包容性があるという特徴を具えていること 門戶の 眩

す)、房審権 学の方面において彼は、「学は六芸に在り、経首の三聖、 来知徳(『周易集注』 馮時行 李鼎祚(『周易集解』著わす)、譙定(程氏易を伝える)、 景鸞(施氏易を伝える)、衛元嵩(『元包経』を撰す)、 る)、厳君平(専ら大易に詳しく、揚雄に伝える)、 趙賓(『易』の「箕子」を「荄茲」とする。孟喜に授け 人物として以下を挙げる。商瞿(孔子の易学を伝える)、 (易をまねて『太玄』を作る)、任安(孟氏易を伝える)、 『大易』の伝、蜀は特に盛と為す」と言い、その代表的 成果はとても多く、 劉氏はさらに蜀学の重要な成果を総括する。まず、 巴蜀地区が数多く生み出している。たとえば、 (譙定の学を伝える)、 (百家の易を集め解して『義海』を成す)、 』を撰す)等々である。 今に伝えられる唐宋の易学著作 張行成(『皇極』 巴蜀の易学 書を撰

は、

いたものである。 に、明代に象数と義理をともに重視する新たな易学を開ては最大の易学集解である。明代の来知徳『周易集注』は、百家の易注を彙集し、当時の規模とし数易学)の主要な観点を保存している。南宋の房審権の李鼎祚『周易集解』は、漢易と南北朝の易学(特に象の李鼎祚『周易集解』は、漢易と南北朝の易学(特に象の李鼎祚『周易集解』は、漢易と南北朝の易学(特に象の李鼎祚『周易集解』は、漢易と南北朝の易学(特に象の李鼎祚『周の李明祚』の

ある。 衡等である。劉咸炘が程伊川の「易学は蜀に在り」の説 王申子『大易緝説』、明代の熊過『周易象旨訣録』 張浚、張栻父子にはともに『易伝』があり、 解でもあって、僅かに現存する北宋の四部『易』解の一 玄学を融合させたもので、特に仏教学による重要な『易 巴蜀特有の系統である。蘇東坡『東坡易伝』は、易道と 文は今文易と異なるばかりでなく、王弼易とも異なり、 晋代易学家の范長生は つである。 なく、多くの遺漏もあり補充が必要である。たとえば、 一丙子学易編』がある。ほかに、元代の黄沢『易学濫觴』、 周易集義』もあり、 周易正義』を刪定して『周易要義』を成した以外に 当然、こうした劉咸炘の総括は、やはりまだ十分では 清以後、 李調元、 魏了翁は漢易・宋易の両者を並べて重んじ、 巴蜀地区にはやはり多くの易学大家が現 呂呉調陽、 北宋の理学易の成果を集大成する。 『蜀才易』を著わしたが、その経 劉沅、 何志高、 范泰衡 李心伝には 等が

い(注9)。

蜀はその二を得」と。続けて彼は以下を列挙する。 家法は唐に至り斁る。 を作るのを助けた。『資治通鑑』はボリュームから言う 禹は、司馬光が北宋の最も重要な史学著作『資治通鑑 の著作にはオリジナリティを具えている。たとえば范相 繆』『五代史記纂誤』の著者)等々。このうちの大部分 史炤(宋、『通鑑釈文』の著者)、呉縝(宋、『新唐書糾 『宋朝事実』の著者)、程公説(宋、『春秋分紀』の著者)、 杜大珪(宋、 長編』の著者)、王当(宋、『春秋列国諸臣伝』の著者)、 聞證誤』『道命録』等の著者)、李燾 者)、李心伝(宋、『建炎以来繋年要録』『朝野雑記』 伝』の著者)、張唐英 著者)、孫光憲(五代、『北夢瑣言』の著者)、蘇洵 (宋、『資治通鑑』の編纂を補佐、 (宋、『廉吏伝』の著者)、王称 (西晋、『三国志』を著す)、常璩 『諡法』 『太常因革礼』の著者)、句延慶(宋、『錦里耆旧 次に、 そのうちの半分ぐらいは范祖禹によって完成された 史学の方面について。 『名臣碑伝琬琰集』の著者)、李攸 (宋、『蜀檮杌』の著者)、范祖禹 隋前の成書は僅かに十数を存し、 劉咸炘は言う、「史氏 (宋、『東都事略』 「唐鑑」 (東晋、『華陽国志』の (宋、『続資治通鑑 の著者)、費枢 余、 の著

ものである。また彼自身『唐鑑』を著わしている。これものである。また彼自身『唐鑑』を著わしている。これらは、当時の史学以来繋年要録』を著わしている。これらは、当時の史学以来繋年要録』を著わしている。これらは、当時の史学以来繋年要録』を著わしている。これらは、当時の史学された。宋代の歴史を研究する場合、ほとんど蜀人及びされた。宋代の歴史を研究する場合、ほとんど蜀人及びされた。宋代の歴史を研究する場合、温齢が、と言うのには道理がある。

治め、 けてまた多くの文学者を列挙して賞讃する。たとえば、 王褒・揚雄は積極的に模倣して、自分の文章を完成させ 言っている。このあと司馬相如は賦を作り有名になり、 已に『国風』に弁冕し、盛漢に声を揚ぐ。(司馬) 南・召南)分緝し、西主は召公なり。 する所と為る」。これは西周のとき周公と召公が分けて 再び文学方面を論じたい。 周公は東方を主り、 の「召南」にすでに蜀人の作品が見えることを (揚) 雄は、国華の半ばを分かち、 应 大家のうち三人は蜀の人である。 召公が西方を主ったが、その 劉咸炘は言う、 蜀士の作、 二南 詞苑の宗と 固より 相如 (周

> 余緒 競って蘇軾の文章を学び、甚だしきに至っては、「蘇文 す)。子瞻は多能にして、廣大の主と為る。蘇氏の文は、 学の祖とする所なるも、蜀はその三を得て、維れ子 代の楊慎等々。そしてこう述べている。 菜羹を吃するがごとし」という成語さえ生まれたことを に熟すれば、 菜羹、竟に諺語と成る」。これは、 蓋し古に比すべからず。南渡以還、天下を衣被し、羊肉 を承く。明允は強勁にして(明允は即ち老蘇)、兵家の 東漢の李尤、 蘇舜卿、 (老蘇は文善くし且つ善く兵を言い、『権書』を撰 楊終、 羊肉を吃するがごとく、蘇文に生なれば、 北宋と南宋の間の唐庚、 唐代の陳子昂、 南宋以降の読書人が 李白、 。「唐宋: 元代の虞集、 宋代の 八家は晩

三. 信仰面

言っている。

農・黄帝(『帝王世紀』)、あるいは伏羲・神農・祝融ば伏羲・燧人・神農(『尚書大伝』)、あるいは伏羲・神では伏羲・女媧・神農(『春秋運斗枢』)のほか、たとえ指し示すものは不明である。「三皇」については、中原指し示すものは不明である。「三皇」については、中原登場するが、しかしこれは集合名詞に過ぎず、具体的に登場するが、しかしこれは集合名詞に過ぎず、具体的に登場するが、しかしていた。をと、一覧の人々もまた自分の信仰体系を持っていた。たと巴蜀の人々もまた自分の信仰体系を持っていた。たと

蜀の「三皇」と中原の「三皇」には違いがあることが分戦国史書『世本』および前漢『蜀王本紀』に見える。巴皇」はすなわち天皇・地皇・人皇で、最も早期の記述は皇」はすなわち天皇・地皇・人皇で、最も早期の記述は「白虎通義・号』)などと別の言い方もある。しかしい

かる。

おり、青帝・赤帝・黒帝・黄帝・白帝という「五帝 青・赤・黒・黄・白帝と称するなり」(産豆)と述べられて だ諡列あらず、但だ五色を以て主と為す、故にその廟は とも言い、『華陽国志』 叢・柏濩・魚鳧・蒲沢・開明)と言うほかに「五色帝 漢以後の文献である。 嚳・堯・舜(偽孔安国『尚書序』)で、いずれもみな前 もあり、 嚳・堯・舜(『大戴礼記』五帝徳) (『戦国策』 (舜)(『呂氏春秋』尊師)、あるいは少昊・顓頊 五帝」もまた同様である。中原では黄帝・顓頊 は蜀人の歴史的伝統であることが分かる。 たとえば宓戲 趙策)、あるいは神農・黄帝・顓頊・帝 巴蜀の「五帝」は、「五主」(蠶 の蜀志には、開明王 (虚義)・神農・黄帝・堯 のほ か、 朝には 別の言 ・帝 0) 舜 方 帝

人の個人名を附される。巴蜀の場合は、天地人の三才中原の「三皇」は生産方式によって命名せられ、且つ

に至って天下一統と三教合一が唱導され、中央において 皇」、巴蜀のそれを「中三皇」と見なして前に「前三皇 の文化の信仰が混融して一体となったのである。 中原三皇と巴蜀三皇を祭る廟を設立した。こうして諸種 象とした。この信仰は道教の信仰のみならず、唐の玄宗 を加え、盤古・混沌等を含む「九皇」を構成して信仰対 才皇」である。この後道教が中原の をもって命名される。つまり、 「三皇」とを互いに結合させ、 五色帝」が代表しているのは一種の五行観念である。 中原の 天統、 |三皇」を |後| 「三皇」と巴蜀の 地統、 人統の「三

これらのことはすべて、巴蜀の特殊な古史伝承の体系と うに及んで、 季にするなどである。のちに劉邦は漢中の王となり、巴 たとえば、四方を改めて五方としたり、四季を改めて五 巴蜀は五を尊び、多くの場合、五と組合せる。『洪範 特有の三才観念・五行観念と密切な関係がある かった。 ていたが、 人は西方の民俗の影響を受け、 蜀の「五色帝」の概念を応用するに至った。早くより秦 が「五時」を論じる場合でもまた多く五を組み合わせる。 劉邦が「我を待ちて五 しかし結局一個のシステムとして作り上げな 五色帝の五廟を建設して祭祀を行なった。 黒帝・白帝・赤帝と言っ (帝)となる」(注11)と言

四.経典面

経」を刻した際にもそれらは存在した。蜀人が経典の体 の体系は後漢に至って普遍的に認可された。鄭玄が「群 なかった。その地位は推して知るべしである。「七経 かしただ「伝」とは言えても「経」とは呼べるものでは 原にも『論語』『孝経』が伝えられていたとはいえ、 を備えていて非常に尊崇されていたからである。 の倫理・道徳の内容は極めて豊富で、経典としての価値 改革しようとしたところにあり、『論語』『孝経』のなか 見える)を作り上げた。その理由は、巴蜀の蛮夷 漢時期になっても、博士はただ「五経」(『詩』 『書』 『礼』 なって『易』と『春秋』を増やして「六経」とした。前 教う、弟子蓋し三千」)を継承したもので、その晩年に 周の国子に教える教材である「四経」(『楽記』に言う、 も早く孔子はその初年に 「先王の『詩』『書』『礼』『楽』に順いて以て士を造る」、 "易』 『春秋』) を伝えるのみであったが、文翁石室は 五経」の体系を突き破って、「五経」のほかに『論語 儒家の経典は絶え間なく展開 遍く注す」る時に 』に言う、「(子は)『詩』『書』『礼』『楽』を以て を加えて「七経」(『三国志』 『論語』 「四経」を伝えたが、これは西 『孝経』はあり、 してゆく過程である。 や『華陽国 「熹平石 当時中 八の風を || || || に 最

に拡大し、五代の孟蜀はまた「九経」から「十三経」に 塊、 至って、廖平は今文経学と古文経学を厳格に区 し、「十三経」を「十四経」にまで拡大した。 され、且つ同じ性格を持つ『大戴礼記』を経典に編入 するところによれば、 広げた。南宋の時に至って、史繩祖『学斉佔畢』 とんど無い(注12)。 が激しい。その他の石経については校勘に使う価値がほ ○塊、杭州の「紹興石経」はもっと少なく、その上風化 ている。西安の「開成石経」が保存してきたのは一一四 石碑は極めて多く、晁公武が「石は千数を逾ゆ」と述べ 当時「石室十三経」には注の文まで付帯されていたので 経」であり、「十三経」の概念はここから形成された。 て十三種の経典にまで拡大された。すなわち「石室十三 である。蜀の石経は五代の孟蜀から始まり、北宋になっ 何種かは当時ただ「伝」としてしか認めらなかったから たのはわずかに「九経」に過ぎなかったのは、その他 系を突き破って中原の認可を獲得したと言ってもよい。 ·開成石経」が十二種の経典を刻しても、「経」と呼ば 唐代に至り、 保存されて北京国子監に至った「乾隆石経」は 経典を試験するのに「九経」ができた。 漢代の文翁石室は ある人が『礼記』と同時に生み出 「五経」から 別 「七経_ 0)

文・古文二つの大きな系統に基づいて儒家経典を詮釈

実させようとしてきたことが分かる。いないにしても、蜀人は不断に努力して経典の体系を充と試みた。あとの二度の努力はまだ最終的な認可を得てし、「十三経注疏」を「十八経注疏」にまで拡大しよう

動が後漢の許・鄭の学(古文経学)から前漢の「今文経 ており、 的方法による経学研究が全面的に到来することを予見し 経注疏」の構想は、なお未完成ではあったにせよ、 書」体系の形成を支えることにもなった。廖平の「十八 子』を経典に編入させるという呼び声に応じることにな を「十三経」に拡大することで、唐代中葉以来の『孟 は斉魯に比ぶ」(『三国志』『華陽国志』)などと言われ、 術が盛んとなり、「蜀儒の文章は天下に冠たり」、「蜀学 が改変された。そして、巴蜀地区には孝廉が輩出し、学 漢になってもなお「蛮夷の風あ」った(『漢書』)」状況 り、「西辟の国にして戎狄の長」(『戦国策』)と言われ、 家の倫理道徳観念が急速に巴蜀地区に広まることにな することで、明確に『論語』『孝経』の地位を上げ、儒 出してきた。文翁石室時期は 西南鄒魯」の呼び名が生まれた。「蜀石経」が「九経 儒家の経典体系の拡大ごとに蜀学は重要な意義を生み 心性論儒学の最終的な形成を促進し、宋儒 清朝学者による「復古を以て解放を求める」運 「五経」を「七経」に拡大 0) 歴史 四四

学」に復帰するあらたな進展を促進した。

三、「蜀学」の核心的思想

節文することこれなり」と。「仁、義、礼、智」は孟子 ず、我固よりこれを有す、思わざるのみ」と。『孟子』 隠の心は仁なり。羞悪の心は義なり。恭敬の心は礼な て、「仁、義、礼、智」を強調して、それを「四徳」あ によって構築された「仁」を核心とした「仁義礼」の構 び、児良は後を貴ぶ」(注語)と言われる。儒家思想は孔子 を知りて去らざることこれなり。礼の実は、この二者を 義の実は、兄に従うことこれなり。智の実は、この二者 離婁篇上に言う、「仁の実は、親に事うることこれなり。 り。是非の心は智なり。仁義礼智は外より我を鑠るに非 るいは「四端」と呼んだ。『孟子』告子篇上に言う、 の等は、礼の生ずる所なり」と言われる。孟子に至っ す。義は宜なり、賢を尊ぶを大と為す。親親の殺、 造を持っており、「仁は人なり、親を親とするを大と為 貴び、陽生は己を貴び、 貴び、関尹は清を貴び、子列子は虚を貴び、 老聃は柔を貴び、孔子は仁を貴び、墨翟は廉 先秦諸子の学術にはそれぞれ主とするところがある。 孫臏は勢を貴び、王廖は先を貴 陳駢は斉を

五常の道」(注15)となり、 礼智」と「信」が組み合わされ、「仁・義・礼・智・信 義は信を貴びて詐を賎む」。ここにおいてまさに「仁義 を重んず」。また、『漢書』董仲舒伝に言う、「『春秋』の た。『春秋繁露』楚荘王に言う、「『春秋』は礼を尊び信 仲舒に至って、 であるべきで、「聖」なるものの徳行を指している。 証されるところで、この箇所の「聖人」はまさに「聖 う。この考え方はすでに新たに出土した文献によって実 るや」に注して「或ひと曰く、『人』は衍字なり」と言 るなり」と(注注)。朱熹はこの箇所の「聖人の天道におけ の天道におけるや、命なり、 るや、礼の賓主におけるや、知の賢者におけるや、 心篇下に言う、「仁の父子におけるや、義の君臣におけ が結合して「五行」となったことが分かる。『孟子』盡 あって、ここにおいてまさに「仁、義、 思想の核心的な価値であり、その最高の境界は「聖」で 四徳のほかにさらに「信」を大変重視し 中国の悠久なる二千年余りの歴 性有り、 君子は命と謂 礼、智」と「聖 聖人 わざ 董

を創造的に建設し発展させた。王褒以来、「道徳を冠り、家理念とを互いに結びつけ、「道徳仁義礼」の価値構造る実践性という現実感覚と少し異なって、道家思想と儒巴蜀の大地に育まれた古代「蜀学」は、儒家が重んじ

史に影響を与え続けている。

んで長生す」と(注17)。

義。を処す、これを義人と謂う。謙退辞がして窮まり無し、これを仁人と謂う。 こと以てここに至るやと。荘子曰く、虚無無為にして、 進め、 純仁を履み、六芸を被て、礼文を佩ぶ」(産エロ)ことを主 和を守る、これを礼人と謂う。凡そこの五人は、皆楽し ざる所無し、これを徳人と謂う。万物を兼愛して、 万物を開導す、これを道人と謂う。清静因応して、 有り。敢て問う、彼の人は何を行ないて名号の殊謬なる 千古一系の体系として継承されていった。厳遵は言う、 体とする核心価値理念を構築した。これは後世、 て、易・儒・道を融合した「道・徳・仁・義・礼」を一 を失いて而る後に礼あり」という五徳対立学説の補修を 失いて而る後に仁あり、仁を失いて而る後に義あ 至って、『老子』の「道を失いて而る後に徳あ 故に道人有り、徳人有り、仁人有り、義人有り、礼人 を処す、これを義人と謂う。謙退辞讓、 初歩的な「道徳仁芸礼」の構造を形成した。 同時に儒・道相反する状態に対して矯正を進め 理名正実、 敬して以て 蜀学の ŋ 徳を

ぐ」と(#B)。揚雄の『劇秦美新』に言う、「神明の祚すで」と(#B)。揚雄の『事はこれを道、徳、仁、義、礼に繋徳、仁、義、礼はこれを身に譬えんか」と(#B)。また厳遵の弟子・揚雄は『法言』問道のなかで言う、「道、厳遵の弟子・揚雄は『法言』問道のなかで言う、「道、

を冠り、 る所、 り、 る。 たとえば厳遵は先に引いたように 純にそれを口にするだけではなく、 との来知徳の表現はもっと完璧である。すなわち「 起ちて道徳遷り、 践的な関心である。 的レベルというのは、本体に対する究極的な関心であ の側面から考えることがここから分かる。形而上の道徳 に分けている。一つは、 まりて天下正し」(注意)、「故にこれを称して道、 短経』量才のなかで指摘する。「故に道、 智」の四徳の前に「道徳」を冠する。唐代の趙蕤は るは罔し」と(産の)。このように蜀学では、孟子 つめは、 ……」と述べたが、そこには「天地の由る所、 体なり」(注窓)。三蘇は蜀学の核心的価値観を二つの面 道徳仁義礼」というこの仕組みに関して、 の注中で言う、「それ道、 形而下の実践的レベルというのは、 蜀人が核心的価値観を構築する際、 兆民の托す所、 仁義を履み、 形而下のレベルでの「仁、義、 信と曰う」(注22)。 礼法興りて淳樸散ず」と(注2)。 明の楊慎に至ってこう言う、「仁義 道、 百家を衣て、六芸を佩ぶ」(注答)。 形而上のレベルでの「道」、二 徳、 北宋の張商英はその 徳、仁、義、礼の五者は 仁 一道人有り、 義、 論証を伴っている。 日用生活での実 往々にして二つ 礼 礼、楽」であ 智と云わざ 蜀人は単 徳人有り 物類の所 少しあ 道徳 義定

り、 以は、 差異、 なり、 に異同が生まれるのは、「物の斉しからざるは、 陽の変化、「太和」は平衡と和合、万事万物はすべて元 たことはすべて社会の現実が必要とする人間のランクの なり」という孟子の言葉の通りである。 て違いが生まれる。すなわち、 という五種の徳行は、 分離し、剖判して数等と為る。 意に大小有り。或は小人と為り、 少有り、 は男と為り、 下有り。 而下の具体的な事物である。 を目標としている。それ以外の あり始あり、そして陰陽変化の制約を受け、 道 道に深微有り、 仁人有り、 は根源 造化に応じて形成された人格の相違の反映なので 太和祖と為る」という根拠が前提になっていた。 道これが元と為り、 清める者は天と為り、 性に精粗有り、 陰は女と為る。 (元)、「徳」は始まり 義人有り、礼人有り」(注26)。道徳仁義礼 徳に厚薄有り、 人間の先天的な禀受の差異によっ 命に長短有り、 徳これが始と為り、 人・物は假を稟け、 厳遵はまたこうも言う、 道行に厚薄が生じ、 濁れる者は地と為り、 「仁義礼」などはみな形 故に道人有り、 或は君子と為り、 神に清濁有り、 (始)、「神明」は陰 しかし、こうし 情に美悪有り、 太乙と平衡 神明宗と 受に多 和に高 物 徳人有

揚雄は『法言』問道において、この五徳をひとりの人

あ

る。

間 ないと言っているのである。 成りたいと思うなら、この五つの修養を欠くことはでき 君子に成りたいとか、 義は事を処する際の原則、礼は行事の規範である。人が ここでは、道は天道であり、人間の導き手であり、 す。天なり。合えば則ち渾じ、離るれば則ち散ず」(誰の)。 を人とし、義は以てこれを宜とし、礼は以てこれを体 道は以てこれを導き、徳は以てこれを得、仁は以てこれ 人が天より禀受する徳行であり、仁は人を待する善心、 の修養にとって必須のものと見なしてこう言ってい 道、 徳、仁、義、礼はこれを身に譬えんか。 甚だしきは修養して賢者・聖人に 夫れ 徳は

尊卑に分有る、これを礼と謂う云々」(注28)。道は踏に通 を立つ、これを義と謂う。 これを仁と謂う。義は宜なり。 なり。人をして各おのその欲する所を得しむ、これを徳 り、行きては之く所を知り、事には乗る所を知り、 する。「夫れ道は人の踏む所なり。居りては為す所を知 をきっちりと説明する。彼は『定名』のなかでこう指摘 ては止まる所を知る、これを道と謂う。 道徳仁義礼」と「智信」の重要性およびその相 【『長短経』は更に、人間の行動という角 仁は愛なり。 利を致して害を除き、兼愛無私、 礼は履なり。 是非を明らかにし、可否 徳は人の得る所 進退に度有り、 度から 互関係 動い

む所、 もやはり「親」、義もやはり「宜」、礼もやはり「履」で 各おのその欲する所を得しむ。仁は人の親しむ所、 しかし五徳の具体的な表現と解説については、かえって あ 彼の見解では、道はやはり「踏」、徳もやはり「得」、仁 善を賞し悪を罰し、以て功を立て事を立つ。 **惻隠の心有り、以てその生成を遂ぐ。義は人の宜しき所、** その由る所を知らしめず。徳は人の得る得、 義、礼の五者は一体なり。道は人の踏む所、万物をして 注した『黄石公素書』原始章で言う、「夫れ道、 b) 宋人の張商英は趙蕤の基本的な道筋を継承し、 彼が趙氏の学説を受け継いでいることが分かる。 夙に興き夜に寐ね、以て人倫の序を成す」^(注20)。 礼は人の履 万物をして 自分が

な保障を得る。

由る所を知四、

るがいる。 るの所有れば、後に轉た(いよいよ)精なるを出す」 なっていることが分かる。王褒・厳厳・揚雄より以下、 意を使用したり解釈したりする際、互いに繋いで継承 し、一代一代推進させてきた。具体的に言えば、「前に で、で、彼らはこれらの概 がっていることが分かる。王褒・厳厳・揚雄より以下、 は変・張商英などの人々に至るまで、彼らはこれらの概 をを使用したり解釈したりする際、互いに繋いで継承 し、一代一代推進させてきた。具体的に言えば、「前に なっていることが分かる。王褒・厳厳・揚雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・揚雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・揚雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・揚雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・揚雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・揚雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・楊雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・楊雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・楊雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・楊雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・楊雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・楊雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・楊雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・楊雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・楊雄より以下、 なっていることが分かる。王褒・厳厳・楊雄とりは、「前に なっていることが分かる。王褒・厳厳・楊雄とり以下、 なっていうことが分かる。王褒・厳厳・楊雄とり以下、 なっていうことが分かる。王褒・厳厳・楊雄とり以下、 なっていうことが分がる。というこの五つの概念を使う時 承と発展が見て取れる。

ばかりでなく、さらに後世の全国的な儒学教育に対して 代、蜀を治め蜀を安んじるために良好な手本を提供 展に深く広く影響を及ぼした。こうした「文教興蜀 も模範とモデルを示す役割を果たした。 めたが、中国に流行すること約一一〇〇余年、儒学の発 石経』となり、儒家の『十三経』の経典体系の基盤を定 経典は特に五代の孟蜀に始めて刻され、北宋宣和の 漢の高公は周公の礼殿を創設し、 めて地方学校を開き、 組成部分となった。両漢以後の巴蜀は、 しあい、推進しあって、 いて、「蜀学」と中原の学術は互いに影響しあい、 から体系を成している。 た。のみならず、豊富多彩で独特な特色を具え、 悠久の歴史において途絶えることなく高潮が次々に訪 |廟学合一」「大度包容」「経伝同尊」という規範は、 巴蜀の大地に生まれた一方の学術として、「蜀学」は 儒家の『七経』を伝播させた。 長期的な流伝と発展の過程にお 祖国の文化宝庫のなかの重要な 古先の聖賢を祀った。 前漢の文翁が初 おのず 作用

系・核心的価値などの方面において獲得した学術の成果「蜀学」が制度設施・儒道合治・信仰体系・経典体

て形成された「道徳仁義礼」という核心的価値を利用して形成された「道徳仁義礼」という核心的価値を利用しくないの祭祀システムに範を取って、新たに巴蜀の信仰体系を構築するのである。さらに、「蜀学」の経典体系の開放性を継承して新しい生命と発展の契機を得させず、の領できるはずである。すなわち、「蜀学」の経典体系の開放性を継承し、儒学学科の建設に力を入れ、儒重学の独特な「三才皇」「五色帝」および「周公礼殿」の祭祀システムに範を取って、新たに巴蜀の信仰体系をの祭祀システムに範を取って、新たに巴蜀の信仰体系をの祭祀システムに範を取って、新たに巴蜀の信仰体系をを果たしたことがあるが、現代の学者は「蜀学」の教をと成功体験は、かつて歴史上道案内とモデル提供の役割と成功体験は、かつて歴史上道案内とモデル提供の役割

注

り

信仰があり、系統がある「新蜀学」は、

必ずや機運

を構築する。こうしたことは、

時間が掛りはするけれど

陣地(活動の場)があり、

経典があり、

て、新たに現代に適合する儒学の普及と応用の理論体系

に乗じて誕生するに違いない。

- (1) [漢] 班固『漢書』巻二十八下「地理志」第八下、文淵閣四
- 《2)[漢]司馬遷『史記』巻一百二十九「貨殖列伝」、中華書局

「班十文集」巻十、成都古籍書店、一九九六年影印。 『推十文集』巻十、成都古籍書店、一九九六年影印。

3

- (4) [宋] 呂陶『浄徳集』巻十四、文淵閣四庫全書本。
- 線裝書局出版。(5)[明]周復俊『全蜀芸文志』巻三十六、劉琳、王小波校点
- (7) [清] 李承熙:『錦江書院志略』巻十、『儒蔵』史部第二四六冊:(6) [漢] 班固『漢書』巻八十九「循吏伝」、中華書局標点本。
- 成都四川大学出版社、二〇一一年。

(8)『推十文集』巻十、成都古籍書店、一九九六年影印

- にこう言った、「易学は蜀に在り、爾盍ぞ往きてこれを求めざて、かつて彼に易学を教えてくれるよう頼んだ福建人・袁滋(9)程伊川とその兄は成都で一桶職人が『周易』を読むのを見
- 易学の影響を受けたであろう等々。こうした巴蜀易学の因緣のも重慶涪陵には程子の「点易洞」があるから、伊川は巴蜀今も重慶涪陵には程子の「点易洞」があるから、伊川は巴蜀今も重慶涪陵には程子の「点易洞」があるから、伊川は巴蜀今も重慶涪陵には程子の「点易洞」があるから、伊川は巴蜀のと。結果として袁滋も眉・邛の間で「醬を売る薛翁」に会っる」と。結果として袁滋も眉・邛の間で「醬を売る薛翁」に会っ
- (10) [晋] 常璩『華陽国志』巻三「蜀志」、劉琳新校注本、四川

よって、「易学は蜀の在り」と言う。

高帝問いて曰く、『天に五帝有り、今四は何ぞや』と。博士そ(1) [北魏] 酈道元『水経注』巻十八「渭水」。その文に曰う、「漢

なり』と。遂に北時祀黒帝を立つ」。文淵閣四庫全書本。 の故を知るもの莫し。帝曰く、『我これを知る。我を待ちて五 蜀石経は当時文翁石室に建てられ、のちに原碑は失われた。

12

- され、やっとその遺失が回復された。今日国家図書館に九冊 ている。 が蔵されている。また、劉氏石印本八冊もあり世に行なわれ の拓片を発見した人がいて、ここにおいて周恩来総理に報告 九六五年になって、香港の骨董市場で劉体乾所蔵の『蜀石経
- (13) 『呂氏春秋』 審分覧、 二〇〇九年、 第四六七—四六八頁。 不二、許維遹 『集釈』 本、 中華書局
- 14 [漢]趙岐注、[題宋] 九九九年、第四六三—四六四頁 孫奭疏『孟子注疏』、北京大学出版社、
- (15) [漢] 班固『漢書』巻五六「董仲舒伝」、中華書局、 第二五〇五頁。 一九六
- 16 九七年、 [梁]蕭衍『文選』巻五一「四子講徳論」、 第七一五頁 中華書局、 一九
- (17)[漢]厳遵『道徳指歸』巻一「上徳不徳」篇、明 本。また王徳友整理本 (中華書局出版)もある。 『津逮秘書』
- (18) [漢] 揚雄著、 第七四頁 韓敬注『法言注』、中華書局、 一九九二年
- 第三七四頁。 [漢] 揚雄著、 韓敬注 『法言注』、中華書局、 一九九二年

- 20 漢 揚雄 『揚子雲集』巻四、清文淵閣 『四庫全書』本。
- 21 22 唐 唐 趙蕤 趙蕤 『長短経』巻八「定名」、文淵閣 『長短経』巻一「量才」、文淵閣 『四庫全書』本。 『四庫全書』本。
- 24 23 魏叢書』 [明]楊慎 [旧題漢] 黃石公撰、[宋] 張商英注『素書』 不分巻、明 本。 『升庵集』巻六五、上海古籍出版社、 一九九三年
- [清] 黃宗羲『明文海』巻一三八来知徳「答問」、 清涵芬樓

25

第六三四頁。

- (26) [漢] 厳遵『道徳指歸』巻一「上徳不徳」篇、明 「津逮秘書
- (27) [漢] 揚雄著、 本。 韓敬注 『法言注』、中華書局、 一九九二年
- 第七四頁。
- 28 [唐] 趙蕤 [旧題漢] 黄石公撰、 『長短経』巻八「定名」、 [宋] 張商英注 文淵閣 『素書』 不分巻、明 『四庫全書』 本。